

2017
おもろ
チャレンジ

茶文化の伝播者として、茶の聖地をめぐる －文化行政の研究 中国

公共政策教育部 専門職学位課程 1年

磯貝 茉莉衣

中国、台湾、香港
2018年2月12日-
2018年3月10日



渡航概要と内容

私は今回、自身が以前取得した中国茶資格の有用性に関心を持ち、「茶文化の伝播者として、茶の聖地をめぐる－文化行政の研究」というタイトルのもと、“中国においてなぜ茶が普及しているのか”を調査してきました。調査地は、近郊に茶産地を持っている地域や、茶市場・茶藝館などが多く存在する地域である、台湾・広州・成都・杭州・上海を訪問してきました。調査内容としては、“中国においてなぜ茶が普及しているのか”について、中国政府が茶の普及体制を整えているから普及しているのではないかという仮説を立て、その普及体制（博物館での茶の説明のされ方、市場における中国茶資格の取得状況など等）を調査すべく、各都市に存在する茶に関する博物館や茶市場を回りました。（仮説を立てるうえで、現在、大阪観光大学観光学部専任講師で『現代中国茶文化考』というご本を書かれている王静先生の見解を参考にさせていただきました。）

渡航場所

台湾

- ・「坪林駅」近くのお茶屋さんを訪問、「坪林茶業博物館」にて台湾での茶業の歴史を学ぶ
(次頁・写真左)
- ・「新北市立莺歌陶瓷博物館」を訪問、台湾での茶器の歴史を学ぶ
(次頁・写真中央)
- ・台湾北部で扱われている茶の種類・販売方法などを調査・ヒアリング
(次頁・写真右：阿里山高山茶、木柵鉄観音、碧羅春の試飲と茶請けの試食)
- ・猫空で生産されている木柵鉄観音の種類、販売方法などを調査



広州

・「芳村茶葉市場」での茶の種類・販売方法などの調査/ヒアリング

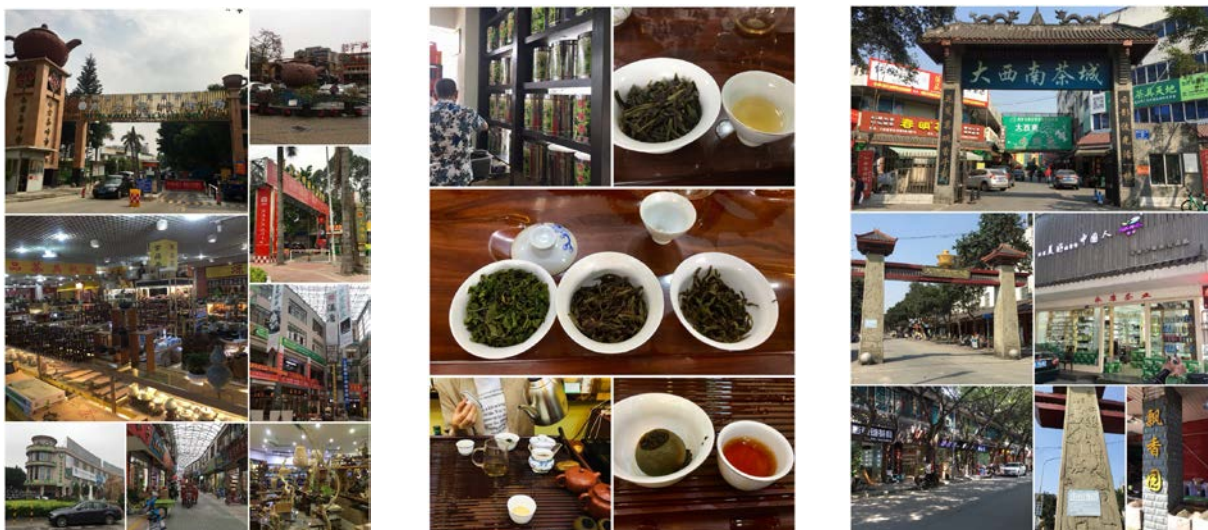
(下・写真左：中国一の大きさを誇る茶市場。六大茶の茶葉専門店だけでなく、茶関係の道具や家具の店も)

(下・写真中央：上左から鉄観音、鳳凰単叢蜜蘭香、古樹鳳凰単叢、小青柑普洱の試飲の様子)

成都

・「大西南茶城」での茶の種類・販売方法などの調査/ヒアリング、中国茶の茶館視察

(下・写真右)



杭州

・「中国茶葉博物館」訪問、中国茶葉が世界に対して与えた役割の歴史を学ぶ

(次頁・写真左・上の1段目2枚：博物館外観)

・「西湖茶葉市場」での茶の種類・販売方法などの調査/ヒアリング

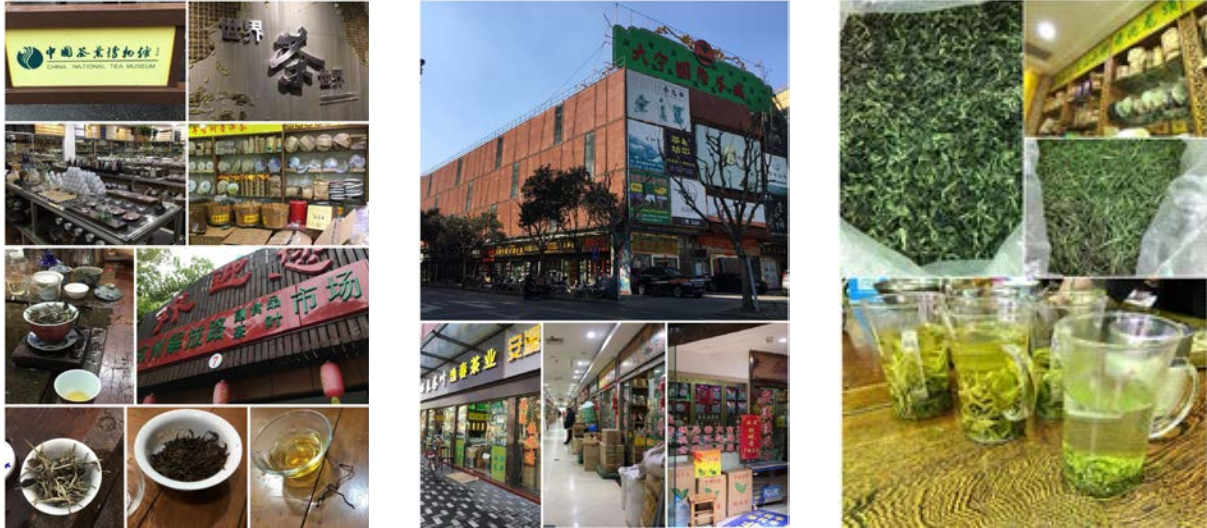
(次頁・写真左・2段目から：左の白い茶葉が月光白、黒い茶葉が九曲紅梅の試飲)

上海

・「上海大寧国際茶城」での茶の種類・販売方法などの調査/ヒアリング

(下・写真中央:「上海大寧国際茶城」の外観と内観)

(下・写真右:茶城内の緑茶専門店で試飲した様子。反時計回りに碧羅春、龍井茶、高山雲霧、開花龍頂。)



・渡航中に日本との文化の違いなどから苦労したこと・渡航中に起こったトラブルとその対処方法

(1) (文化の違いではないかもしれませんが、) お茶屋さん、良い品質の美味しい中国茶を試飲させてもらえるよう、自分の思いを伝えていくのが難しかったです。

▼中国茶は日本茶と比べて、最高級茶には値段に上限がないほど高い値がつきます。(例えば、単叢という広東省で有名な烏龍茶に関しては、一株ごとに栽培されるという性質ゆえに希少性が高く、数十グラムで数万のお茶も普通に存在します。) そのため、販売するお店の方としても、客を選び、試飲で高級茶を出すか否かを決めているようでした。

私の場合、初めはお店の方からは、「単なる観光客がお茶のことを知らずに迷い込んできた」、という印象を持たれていたようでした。今回の渡航企画中、私はくたびれた普段着に汚れたリュックサックを背負い、低価格ホテルに備え付けられているシャンプーのお陰で髪はごわごわ…という状態でしたし、最初の自己紹介では「学生です」と宣言して入店していたので、上のように思われてしまうのも当然だと思います。

なので、最初の方は、「〇〇茶(割と高級なお茶)の良いランクのものを飲ませて下さい」と私がお願いしても、お店によっては「このお茶は高すぎるから、こちら(価格低めのお茶)を飲んでみて」と当たり障りのないお茶を出されたりしていました。また、茶のリストがあるお店に関しては、そのリストの中から選んでお茶を飲ませてもらう、というような感じでした。

しかし、「私は凄く中国茶が好きで、〇〇茶(その地域で有名なお茶)を飲みたくてここまで来たのです。」と伝えつつ、「もっと味や香りが継続するお茶はある?」「この茶の産地の高度、800m越えくらいなの?」などと、私からお茶に関する質問や自分の好みを中国語で伝えていく

と、お店の方の態度が変わってきました。「あなた、お茶のこと分かってるね。」と。

この言葉をお店の方からもらえると、いままでは「高すぎるから」と飲ませてもらえなかった茶を試飲させてもらえるようになりました。そして、私の嗜好に合いそうなお茶を色々と紹介して下さったり、私が気に入った茶の関連記事が載っている雑誌を持ってきて、茶に関する様々な情報を教えて下さったりしました。また、リストのあるお店に関しては、「高すぎてリストには載っていないけど高級なこのお茶も飲んでみてよ」といって試飲させていただけることもありました。お茶屋さんとの距離が狭まり、お互いの関心が同じ方向を向いていると思えた瞬間は、とても嬉しい時間でした。

「お茶のこと分かってるね。」という言葉の後に出てくるお茶は、どれも私が日本では経験したことのないお茶ばかりでした。南国のフルーツのような香りを持ったお茶や、野生種で甘みが持続する茶など、お茶の世界はさらに深いことを教えてもらいました。

この経験を通して、何のつてもなく一人で現地に乗り込んだ時には、自分の情熱を相手に伝えるよう伝える努力が非常に重要なのだと痛感しました。また、手間をかけた素晴らしいものに出会うことで、また一段と深く、面白い世界を見ることができると知りました。(冒頭の写真は、広東省広州の「芳村茶葉市場」内にある単叢専門店のおばさまと撮った写真。特徴的な渋みが有名な単叢ですが、渋みの一切ない、甘い単叢があることを知りました。右の写真は、上海のお茶屋さんで、金駿眉の特級と一級の飲み比べの様子。)



(2) 海外の方々から、日本の様々な事情や自分自身の考えなどについて聞かれ、どう表現すれば相手にうまく伝えることが出来るのか悩みました。

▼お茶屋さんにいる方々と積極的にコミュニケーションをとりましたが、日本人の中国茶事情や日本のお茶事情、日本の有名な観光地などについて聞かれることが多く、誤解なく伝えるのが難しかったです。特に、今回の旅行で印象的だったのは、台湾の猫空で偶然出会った台湾出身の北京在住のご家族との会話です。このご家族とは、非常に仲良くなり、数日間、ご飯を一緒に食べたり（ごちそうして頂いたり）、博物館に一緒に行ったりと時間を共に過ごしました。ご家族は、日本に対しても非常に高い関心を持っていらして、私と一番年の近い高校生の娘さんは、日本のドラマやアニメについて、私より多くのことを知っていました。“日本人として台湾の政治体制はどう思う？北京の体制はどう思う？”という話もしましたが、自分の考えを正しく伝えることができなかったです。この経験から、海外の方々と接する際には、語学能力のみならず、自分自身の捉え方についても考えを深め、整理しておく必要性を感じました。

(3) 中国はとにかく人が多かったです。特に広州は人口密度が非常に高く、地下鉄も駅・ホーム共にすし詰め状態で、人を押しのけないと乗り降りすることができませんでした。

▼中国の人口は日本の約11倍という事実は知っていましたが、以前にも北京や上海には行った

ことがあったので中国の人の多さに驚くことはもうないだろうと思っていました。また、人口密度に関しても、もともと東京出身でしたので、渋谷のスクランブル交差点や新宿の雑踏には慣れ親しんでいたことから、並大抵のことでは驚かないと思っていました。

しかし、広州の人の多さは、私の想像の遥かに上をいっていました。地下鉄の駅のホームが、既に満員なのです。電車ではなく、駅でさえ、常にすし詰め状態でした（下の写真は広州の地下鉄「广东火车站」の朝の様子）。そして、この様な状況のもとで、降りる人と乗る人は互いにぶつかり合いながら各々の目的を達成しようとしていました。押されたり割り込まれたりしても、怒り出したり・注意したりする人がほぼいませんでした。

日本では、電車を乗り降りする際に「降りる人が先」という文化がありますし、この文化は乗り降りをスムーズに行うために合理的なものだと思います。そして、もし降りようとしている時に乗ってくる人が押しのけて入ってきたら、おそらく人によっては怒りたくなる（もしくは注意したくなる）と思います。しかし、広州のように、降りることさえも難しい余裕のない空間では、「降りる人が先」という合理的な文化は根付いていなく、そもそも「降りる人が先」が当然な世界ではないために、怒る人も少ないようでした。この経験から、合理性を求めるためには、合理性を実現できるだけの余裕を維持できるような設計が必要条件であると学ぶと同時に、何が常識になっているかで人の態度も大きく変化することを学びました。



(4) 急成長中の成都では建設現場が多く、歩道にも塵などが舞っていました。また、地図で確認できる通りが工事中で行き止まりになっていて、引き返さないと目的地まで辿り着けないといった場面が何度もありました。

▼成都に対しての私のイメージは、三国志の蜀の国として有名な地域で、九寨溝やパンダ園といった観光地にも近い内陸都市らしい長閑な場所で、麻婆豆腐がきっと美味しいはず…等と非常に偏った情報によって構成されていました。しかし、実際に訪問してみると、成都是長閑な地域もありましたが、都市中心部は、ビル建設や駅の整備でいたるところが工事中、という非常に勢いのあるところでした。

私が成都で調査地に選んだ茶市場である「大西南茶城」は五十块という火車北駅から数 km ある地域にあるので、少し移動する必要がありました。もちろん、事前に地図で位置を確認して移動したのですが、地図上に存在している 4 車線ほどのある大通りは工事中で封鎖、中通りも通行止めという状況で、何度も引き返しながらか移動しました。しかし、なかなか辿り着けなかったので、最終的にはバスに乗って目的地まで行くことにしました。この経験から、成都の急成長ぶり、そして建設ラッシュぶりを体感することができ、中国では沿岸部のみならず、内陸部までも都市整備が進められ、非常に大きな変化を迎えようとしていることを知りました。

■ 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

「おもろチャレンジ」全体を通して、①茶へのより深い理解と、②自らの興味関心への自覚と自信を得ることができたと感じます。

①に関しては、上記渡航場所での学びを通じて得たものです。今回の渡航では、中国（広州、成都、上海、杭州）・台湾（台北）の五都市を回り、それぞれの地域での茶市場の動向調査と、博物館などの公共施設、茶藝館や飲食店など茶を扱っている場所での茶の存在の捉え方・活用の仕方についての調査等を行いました。調査を通じて、中国茶資格取得状況と茶の地域性を知ることができました。前者に関しては、資格取得者は増加しているものの、茶市場の方々がみな資格を取得しているわけではないことがわかりました。後者に関しては、今回渡航した各都市で、お茶の文化的役割が異なることを知りました。（調査報告とはいえ個人の見解でしかないのですが、各都市で別の目的で茶が飲まれている、具体的には、上海ではファッションの一形態として、広州では食の延長として、成都では生活の一部として、台北では伝統文化として茶が飲まれていると感じました。）調査に関しては、資格取得者の資格活用状況を調査する等といった新たな課題を見つけられたので、次回につなげていきたいと考えています。

また、②の学びに関しては、本企画への応募から採択、そして報告などの過程で、自分の関心を見つめ直す機会に恵まれたことで得られたものです。私の場合、「多種多様な茶葉にもっと出会いたい」「地域ごとに異なる形を持つ中国茶文化の世界をもっと知りたい」という純粋な欲求に駆られて応募しました。応募段階では、何から手を付ければいいのか分かりませんでした。しかし、「おもろチャレンジ」には、事前に準備されたプログラム等はありませんので、自分で調査内容を考え、調査地を決め、調査報告を作成する等、能動的に自分の関心を深めることが求められました。この経験を通して、自らの欲求を見つめ、自分の欲求が何への問いから出てきたものかをより鮮明にすることが出来たと思います。具体的には、私の場合、「茶葉への理解を深めたい」という欲求は、茶葉自体への関心はさることながら、茶市場や茶の流通の仕組み、現地の人の茶への理解や茶文化への認識など、中国茶を通してみることのできる「なぜ人は茶を飲むのか」「文化とはどう形成されていくのか」「人々の健康維持を支える社会の仕組みとは」といった、より根本的な社会への問いを持っていることに気づかされました。まだ気づきの段階ですが、将来的には茶生産の現場を歩き、茶の効能に関して中医学等の勉強もするなどして、茶を通して人々がより暮らしやすくなるような社会づくりについて考えていきたいと思うようになりました。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の経験は、今後もライフワークとして中国茶を学ぶための大きな一歩になったと同時に、これから予定している中国留学、そして大学院卒業後の仕事で生かせると考えています。

ライフワークとして学びたいという点に関しては、上に述べたように、茶文化と社会との関係を一生かけて学んでいき、茶を通して社会貢献をできる人に成長していきたいと考えています。

海外留学に関しては、2018年9月から中国の北京大学で本科生として交換留学を予定してい

ます。今回の海外渡航調査では、茶市場や博物館における茶の捉え方を学ぶことができたので、留学を通じて、茶と大学・教育機関との関係を学ぶ機会や、茶の効用の理解につながる農学・植物学などの学習機会を見つけ、茶に関わるさらに多くのことを学んでいきたいと考えています。

大学院卒業後の仕事に関しては、茶を通じた文化交流を推進し、日中関係をよりよくできる人材として働いていきたいと考えています。渡航前、中国茶という文化が、中国に対する肯定的な理解を促進させる文化交流資源になると考えていました。そして、今回の渡航で、茶を通して中国の方々と互いの文化を共有しあうことができ、茶文化交流に確かな可能性を確認することができました。果てしない道だと思いますが、微力でも前進させることができたと思います。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

今から振り返ると、「おもろチャレンジ」に採択され、中国茶を深く勉強する機会をいただけたことは必然だったのかなと思うこともありますが、一年前の私は、自分の中国茶への関心は単なる趣味の一つであり、本企画の研究調査として出すには及ばないと考えていました。しかし、学内の友人と雑談していた時、自分の中国茶に対しての愛を語っていたら、「中国茶のこと本当に好きなんだね。中国茶でおもろチャレンジに応募してみなよ。」と背中を押してもらいました。このように、私の場合は、私自身が気づいていなかった熱意に、友人が気づいてくれるという形で応募に至りました。採択されたことで調査の機会をいただき、茶に関して学びを深めましたが、企画に応募する段階で、自分の中国茶への熱意を自覚できた、私にとって非常に重要な気づきとなりました。

「おもろチャレンジ」に少しでも関心のある京大生の皆さんには、自分自身の興味関心、熱意を持っている事柄について、周りの友人と話してみることをお勧めしたいです。学内には個性豊かで面白い研究意欲を持っている方々が本当にたくさんいると思います。「おもろチャレンジ」をきっかけに、京大生がより自分の興味関心について話せる環境ができれば、もっと楽しいキャンパスになるのではないかなとも思います。ぜひ、熱意を友人に語り、その熱意を本企画にぶつけてみてください！

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*宿泊費

*飲食関係費

*交通費

*海外旅行保険 など